サバイバルラバーズ

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サバイバルラバーズ

【Ｎコード】
Ｎ５４４５Ｉ

【作者名】
大豆

【あらすじ】
学園のアイドルの中の一人である姉と妹。
そして幼なじみ。
俺はそいつらとの関係をひたむきに隠している。
周りに教えたって俺に災厄が訪れるに違いない。

そんな主人公と三人＋αのラブコメ

主人公（前書き）

似たような作品を投稿しています。

予めご了承下さい。

主人公

西宮大弥（にしみやひろや）

いつも倦怠感を漂わせている凡人。

第一章　一節／いつもの日常

月曜日の朝。

週末を堕落し過ごした俺にとって月曜日の朝は起きるのが尋常ではないほど辛かった。

ベッドの魔力とは恐ろしいもので起きようという意思をことごとく拒否した。

おかげさまで遅刻ギリギリだ。

あくびを噛み殺すと見慣れた通学路の風景が涙でぼやけた。

これからまた週末まで忌まわしき学校に登校し勉学に励まなければならない。

学生の宿命ってやつか…。

倦怠感をより一層強め足取り重く学校へ向かった。

さて、話が大きく逸れるが聞いて欲しい。

クラスに一人、または学年に一人の割合で人並み外れた容姿を持つ者がいるだろう。

毎日のように告白されたり、校内を歩けばその場にいる生徒たちの視線を釘つけにする通称学園のアイドル。

そんな奴らと親しくなりたいと思うのは普通の考えだ。

だが俺の考えはその逆だ。

もし親しくなりすぎて周りの奴らから嫉妬の矛先を向けられるのはごめんだからな。

これは俺の妄想でも何でもない、実体験だ。

実は学園のアイドルの中には俺の姉や妹、幼なじみがいたりする。

そのことを知っている奴は極少数なのだが学校中の奴らに知られたら俺は死ぬ、確実に。

だから死なない為に姉妹と幼なじみには俺との関係を他言しないようにきつく言ってある。

『一生のお願いです、言わないで下さい』

と涙ながらに土下座をしながら。

土下座の甲斐あってかまぁまぁ平和な高校生活を満喫している。

しかし一生のお願いは〈他の奴に他言しない〉ということだけなので俺に話しかけたり一緒に登下校しようとしたりする。

「ぼーっとしてどうしたの？」

ほれ、今みたいにな。
横をちらりと一瞥すると我が学園のアイドルがいらっしゃった。
「何でもない」
俺は短い答えると再び前に向いた。
俺の隣を歩くちっこいのは妹の秋羅（あきら）。
その１５０ｃｍという小さな身体。
そして守ってオーラを遺憾なく発揮し、校内美少女ランキングの妹にしたい生徒部門のＮｏ．１を勝ち取っている。
幼い顔立ちに加え言動も子供っぽいのでとてもじゃないが高校生とは思えない。
そんな要素がランキング１位に導いたんだと思う。
本人はよく分からないようだったが喜んでいた。
「今日も帰り遅くなるの？」
視線を俺に向け聞いてくる。
「大会が近いからな」
部活の大会があるため最近帰宅するのが遅くなっていた。

好きでやっていることなのだが練習がきつくて結構心が折れかけている。

団体メンバーという少なからずもプレッシャーもかかる。

「出来るだけ早く帰ってきてね」

そう言いながら手を握ってきた。

俺は何も言わず手を握らせていた。

拒否して泣かれるよりいいし何より妹を泣かせたくない。

秋羅がブラコンなら俺はシスコンかもな。

「秋羅そろそろだ」

「えー、もう？」

他の生徒に見られる前に離れて登校する。

理由は言わなくてもわかるだろう。

「ほら友達が前にいるぞ」

俺は立ち止まり秋羅の頭を撫でてから先に行かせた。

「えへへ、遅刻しちゃダメなんだからね！」

そう言い残し友達の元へ駆けて行った。

走るたびにツインテールがぴょんぴょん動いていた。

いつになったら高校生で頭を撫でてもらうのは恥ずかしいと思ってくれるんだろうね。

身体も心も小学６年生から全く成長してないように思える。

秋羅の将来が心配なのは気のせいであって欲しい。

秋羅は高校生にもなっても兄の俺にベタベタしてくる。

そろそろ兄離れしてほしいのだがその日が来るのは遠くなりそうだ。

一人になった俺はいつものようにぼーっとしながら歩き学校に到着した。

教室へ入ると各々がお決まりの集団で談笑していた。

俺はどの集団に入って談笑することもなく自分の席に座りぼーっとしていた。

決して友人がいないわけではない。

朝は出来るだけ一人でぼーっとしていたいのだ。
席が窓側の一番端の一番後ろという特等席。
外の景色がよく見える。
ジィー
退屈で仕方ないときは外の景色を眺めながらぼーっとするのが一番だ。
ジィー
……。
「和泉(いずみ)、さっきからずっとお前に見られているような気がするんだが気のせいだよな？」
「…気のせい。私は外の景色を見ていた」
俺の隣を陣取る無口な友人はそう言う。
和泉綾(いずみあや)は必要最低限の言葉しか発しないちょっと変わった奴。
「だよな、自意識過剰だったよ」
和泉は外の景色を見ているらしいのだがどうも視線が気になる。
視線を逃れるように体を机に突っ伏したがその動きにあわせて視線も動いた。

俺の気のせいだよな。

「俺がいると外が見づらいだろ」

そう訊くと

「平気」

と短く応えた。

無口無表情な和泉だが美少女の部類に入る方だと自負している。

学園のアイドルとまではいかないがそれに匹敵するほどだ。

そんな奴に直接的ではないがジィーと見られては恥ずかしくなるのは当然のことで、

「やっぱり見づらいだろ？」

とそのまま寝たふりをし視線から逃れた。

それでも視線が痛々しいほど感じられたが間もなく俺の意識はまどろみの中に薄れていった。

俺が目覚めたときには朝のホームルームが既に始まっていた。

初老の中村担任が連絡事項を話している。
誰か俺を起こしてくれてもいいんじゃないのか？
よだれをブレザーの袖で拭きながら隣を見る。
寝ぼけてまだ視界がぼやけているがそこには規則的に息をし机に突っ伏した和泉の姿があった。
腕で枕を作り顔は下を向いているため見えない。
どうやらこいつも寝ているようだ。
中村担任が連絡事項を伝え終わりクラス委員長が号令をかける。
「きりーつ」
和泉を除くクラス全員の椅子を後ろに引き、立ち上がる。
椅子を引く音で起きたのか和泉もゆっくりと立ち上がった。
しかし目は虚ろで意識が朦朧としているようだった。
「きをつけー、れいっ」
ホームルームが終わり休み時間となった。
動きが大分怪しかったが和泉は意識が覚醒したようで教科書を出し

ていた。

俺もあくびをしつつ授業の準備に取り掛かった。

俺にとって授業とは睡眠へ誘い込む誘惑と解釈している。

よって昼休みまでの約４時間、俺は睡魔と死闘を繰り広げていた。

おかげでノートには古代文明の記号のようなものが書かれていた。

まぁノートは和泉や誰かに後で見せてもらえばいい話で、今はさっさと弁当を食べたい。

「西宮ー、食堂行こうぜ～」

手に持っている弁当をぶらぶらさせながら友人は俺を呼ぶ。

「ちょっと待ってくれ」

鞄から弁当袋を出し友人の元へ急ぐ。

「早く行かないと席がなくなるぞ」

友人その１の柏木と共に食堂に向かった。

俺は弁当を食べることしか頭になかった。

だからあんな悲劇に巻き込まれるなんて想像もしていなかった。

第一章　二節／食堂と姉とプリン（前書き）

展開が早過ぎですみません。

和泉綾については一応無口キャラと設定しています。

西宮秋羅は妹キャラです。

さて二節では姉、幼なじみが登場予定です。

※以下見なくても結構です。※

私は情景をうまく表現することが出来ない上、上記にもあるように展開が早いです。

予めご了承下さい。

お気に入り登録して下さった方、閲覧して下さった方、ありがとうございます。

感想、レビューをするほどの作品ではありませんが募集しています。

ここはこうした方がいいんじゃないか等々の意見も募集しています。

長くなりましたが二節の始まりです。

長く生暖かい目でご覧下さい。

第一章　二節／食堂と姉とプリン

食堂に着いた俺たちは空いてる席を見つけることができた。

少しでも遅れると席が空いていない状態になるほど人で溢れかえる。

だから席を確保できただけでも幸運だ。

食堂には購買がありそこで売っているプリンが極上の味。

しかも限定２０個のため争奪戦必至のメニューだ。

プリン目当てに４時限目の授業が終わった途端食堂へ駆け込む生徒も少なくない。

そんな大人気のプリンだが俺は苦労せず手に入れることができる。

それは後でわかることだ。

俺と柏木は会話を交えつつ弁当を食べ始めた。

「今回のテストどうだった？」

柏木はおもむろに訊いてきた。

「テストの話はもうやめようぜ…終わったことだし飯がまずくなる」

赤く着色された体に不健康そうなタコウインナーを箸でつまみ口へ運ぶ。

「今回も赤点ギリギリの低空飛行か…」

と柏木は玉子焼きを咀嚼させながら呟いた。

「赤点にならなきゃ１００点も５０点も同じことだ。気楽に行こうぜ」

「だな…」

思い出したくもないテストの話ですっかり空気が暗くなってしまった。

俺と柏木は黙々と弁当を食べた。

すると俺たちの沈んだ心とは正反対の歓声の声が入口付近から聞こえた。

歓声の理由は何となくわかるがわかりたくない気もする。

「お前の自慢のお姉さまのご登場だぞ」

入口の方を見ている柏木は馬鹿にしたように言う。

「それは言わない約束だろ…」

俺も入口を見るとやはり俺の姉がいた。

周りには男子たちが集まっており、姉は今日も苦笑いをしている。
いつも見る光景なのだがよくも毎日やっていられると思う。
「春霞(はるか)先輩！俺のプリンもらって下さい！」
「俺のも！」
と男子たちは限定プリンを献上していた。
「毎日ありがとう。でも今日もいらないや」
姉は笑顔を振り撒くと持っているプリンを見せた。
「でもたくさんあった方がいいですよ！」
男子たちも必死だ。
「今、ダイエット中だからごめんね」
とあっさり一蹴し男子たちもさすがに後ろに引いた。
「また今度ちょうだいね」
とびっきりの笑顔で周りにいる男子たち、及び食堂内にいる男子たちが沸いた。
「お前の姉ちゃん相変わらず美人だな」
「あぁ」

確かに俺の姉は美人だ。

高校生離れしたスタイル。

どっかのアイドルにも勝る愛らしい顔。

性格もおしとやかで男心をくすぐる。

姉は席を探しながら歩いていた。

そんなときも男子たちは

「俺の隣空いてますよ！」

なんて騒いでいた。

それを見る女子たちの視線は凍死するほど冷たかった。

実は俺も今猛烈に寒気がする。

俺の隣が空いている…。

姉のことだ。

見つけたらすぐに俺の隣に座るに違いない。

そう考えただけでおぞましい。

だから見つかる前に一刻早くここから立ち去らなければならない。

「早く片付けろ」

冷凍食品の唐揚げをちまちま食ってる柏木を急かす。

「まぁ落ち着けよ、急がば回れって奴でな――」

「この場合意味が違うだろ？」

クソつまらないボケをかます柏木に苛立ちを覚えた。

「わざわざツッコミを入れるなんて律儀な奴だな、そして時既に遅し」

ほれ、と指差す。

ここで後ろを振り向いてはいけないと俺の第六感が警報を鳴らした。

「大丈夫だよ、まだ遠い所にいるから」

柏木を信じゆっくりと振り返る。

確かにまだ２０メートルくらい距離があった。

笑顔を振り撒きながら空いてる席を探している。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5445i/

サバイバルラバーズ

2010年10月14日22時55分発行